信州読書会　YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書　トルストイ　『戦争と平和　第二部第五篇』

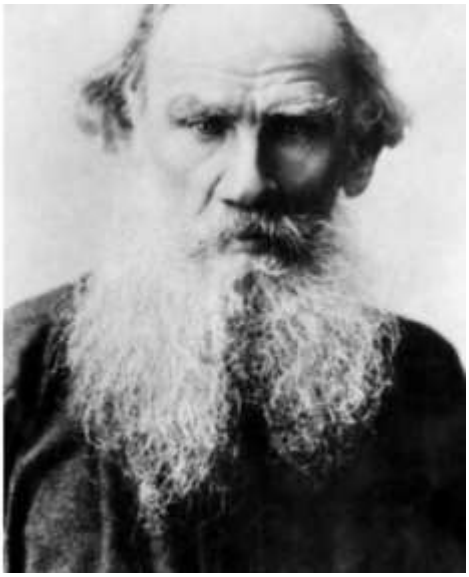
信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
（募集要項はメルマガでお伝えします）
また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会　ツイキャス　[httP://twitcasting.tv/skyPebookclub](http://twitcasting.tv/skyPebookclub)
YouTubeLive　[httPs://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw](https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw)
『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから　[httP://bookclub.tokyo/?Page_id=714](http://bookclub.tokyo/?Page_id=714)
今後のツイキャス読書会の予定です。 [httPs://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284](https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284)
『ツイキャス読書会』 音声のバックナンバーです。
[httPs://www.youtube.com/Playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf](https://www.youtube.com/Playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf)
（各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。）

トルストイ

『戦争と平和』



第 345 回の YouTube 読書会の課題図書は、 トルストイ 『戦争と平和　第二部第五篇』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

作品の解説音声を公開しています。　[トルストイ『戦争と平和』解説]

メルマガ読者　TOTO さん

『戦争と平和』三巻　第二部　第五篇　　トルストイ　感想文

生きるのに夢中で、とても綺麗なのにそれに気づいていない人がいる。そんな人がとても魅力的に見える瞬間がある。

若い頃、「自分の容姿を髪型に頼りたくない」と言って丸坊主にしてきた会社の同期の男性がいた。「なるほど潔し！」と思ったことを思い出した。

第五篇では、社交界を舞台に己の美しさに酔い、それを手段に人を騙していく、クラーギン家の兄（アナトール）と妹（ピエールの妻、エレン）の作り込んだ美しさに胸が閊（つか）えた。
アンドレイの求婚と、言い寄ってきたアナトールへの、「愛」らしきものに迷う乙女ナターシャがエレンの企てにもハマり、心身ともに壊されていった。
まさに「悪の華」を思わせる不品行な二人の表と裏の顔。
その「悪の華」と対照的に、人の為に奔走する主人公ピエールの存在がこの篇でぐっと際立ってきたのだ。

ピエールとアンドレイ、思慮深いこの二人が社交界を嫌悪する多くの部分が、このアナトールとエレンの外見の美しさにそぐわない虚飾で醜い姿に象徴されているのだと思われた。

ロストフ家の次女のナターシャは、アンドレイ・ボルコンスキーと婚約するが、父ボルコンスキー老公爵の反対が発端となり、一年延期されていた。

自分のことは自分が一番わからないと思うことがある。
十六、七のナターシャにとって、自分を客観視することはできない。一年はとても長すぎた。誰を本当に愛しているのかなどと、目の前のアナトールとのロマンティックな出来事に、だだそれだけに酔って、その雰囲気にのまれてしまったのだ。

《あの人たちがあたしを好きにならないはずがないわ》（P.361）
ボルコンスキー家に初めて訪問した時のナターシャ。自身もまた自分の魅力を自負していて、妄想の世界に逃げ込む痛い部分もあるのだから。

従姉のソーニャは、両親もなくロストフ家に助けられている身。周りの悪意にも敏感でとても鋭い。誰が敵か味方かを察知し警戒できるのだ。ある意味無防備なナターシャにとっての「眼」にもなれるような存在なのだ。そして何とかロストフ家の為になろうとするが、ナターシャの盲目的なの恋には、ソーニャの助言は、だだの「敵」となってしまう。
ナターシャは迷走していたのだ。

ロストフ老伯爵の知り合いのアフローシモアという頼もしい大柄な女性がとても良い役どころとして登場する。
一巻で思い出すパーティの場面で、威風堂々としていて、はっきりと物を言うあの好ましい女性がアフローシモアだったのだとわかったのが、読書会の解説音声の中で、「あのマツコデラックスさんのような」という一言からだった。ハッと気づき嬉しくなってしまった。

たしかナターシャを気に入っていたはずだと、危機的状況の救世主になるのではとワクワクしてしまった。
アナトールがナターシャを誘拐しようとする前に、図らずも阻止したのはこのアフローシモアだった。
大男の従僕ガヴリーロの発した一言。トルストイ先生の見せ場はすばらしく面白いのだ。

そのアフローシモアも、そしてアンドレイも、危機に立ち会ったソーニャも、重大かつ困難にぶつかると、なんだかピエールに皆が相談するのだ。アンドレイの妹マリアまで、兄とナターシャの結婚と父の横暴に悩む心の内までは、話すに至らなかったが、ピエールに心許していることが印象的たった。

ピエールの存在感は明らかで、物語を追うごとに真摯で誠実なピエールの姿が色濃くなってきて、これからの彼の人間性がどのように発揮されていくかに目が離せなくなってきた。

親友アンドレイがナターシャとの結婚に敗れ、必死に取り繕う彼の心の奥底の気持ちを自分に重ね、そして優しく見据えているピエールの姿が格別だった。

（引用はじめ）

「あまりにも苦しい内心の思いをかき消すためだけに興奮し、自分にも縁もゆかりもないことを議論したいという、ピエールが知りすぎるほど知っている欲求を彼は今親友のなかに見て取った」（岩波文庫 P.475）

（引用おわり）

いたたまれない親友の深い悲しみがピエールの身体にも辛く沁みながらも、心にはナターシャへの思いを深めていくピエールだった。この深刻な心境の内にも、アンドレイ、ナターシャ、その他の個々の大切な人に対して、必死に尽力するピエールの姿があちこちに読みとれて、とても感慨深い気持ちにさせられた。

ナターシャという魅力的な女性が、時にアンドレイに生きる力を与え、結果辛い決別をも与え、この巻のラストにピエールにも「新しい命」と奮い立つ心を与えてしまう。

この先の戦争も含め、うかがい知ることのできない複雑で至難な天命のようなものを思いながら三巻を読み終えた。

（おわり）

メルマガ読者　シュダイさん

トルストイを読み給え

今回の読書会で「戦争と平和」もちょうど半分である。そこで今回の感想文では本書を読む意義について改めて考えてみたい。

（引用はじめ）

若い人々から、何を読んだらいいかと訊ねられると、僕はいつもトルストイを読み給えと答える。すると必ずその他には何を読んだらいいかと言われる。他になにも読む必要はない、だまされたと思って「戦争と平和」を読み給えと僕は答える。

だが嘗て僕の忠告を実行してくれた人がいない。実に悲しむべきことである。あんまり本が多過ぎる、だからこそトルストイを、トルストイだけを読み給え。

（引用おわり）

「小林秀雄全作品 19　真贋 111 頁」

小林秀雄が言うように「戦争と平和」には全てが詰まっている。そして読者が読みやすいように、飽きさせないように様々なしかけが用意されている。同じ半年をかけるならばこの物語を読破することは凡庸な小説を 50 冊読む以上の価値はあるだろう。

しかしながら、「戦争と平和」がなぜおすすめなのか。これを自分のことばで説明するのは中々難しい。そんなとき最近購入した本の中にヒントが記されていた。

（引用はじめ）

それでも気を取り直して読んでいくと、高校時代、世界史で学んだ清教徒革命の記載に、ささやかな喜びを感じた。さらに読めると、最終的に「寛容性を求めてアメリカに移住したはずの清教徒が、アメリカの地で他者に対して不寛容になっている」という内容を理解した。

自分なりにそうした著者のテーマめいたものを実感したときに、言葉にあらわせない達成感・充実感を覚えることができた。さらに「キリスト教を理解しないと、欧米の話にはついていけないな」と強く認識することとなり、キリスト教が新しい読書テーマになっていた。

（引用おわり）

玉木和彦 「人生を 100 年楽しむためにワクワクリベンジ読書の進め」 32-33 頁

玉木氏が述べる通り読書を通じて自分の持ってる知識が結び付いた時、何ものにも変え難い喜びがある。

名著になればなるほどそれが巧妙であり、「戦争と平和」で言えばナポレオンや祖国戦争といった歴史的事実、ロシア正教や社交界といった文化的背景、愛憎入り混じる恋愛話、カントやショウペンハウエルの哲学といったあらゆるものが散りばめられているのである。

そして名著との出会いが新たな熱源となり「もっと知りたい」という次の読書への動機づけと循環を生むのだ。

だからこそ手始めに良い循環を産むことができる「トルストイを読み給え」ということなのだろう。

（おわり）

メルマガ読者　おおい元気ぼっくすさん

ピエールとナターシャ

　愛を中心とした人間模様の章とでもいうのだろうか。
　まったく戦争の匂いが感じられない。特に女性は着飾ってのパーティーや観劇三昧。いわゆる「平和」のパートになるのか。
　その一方で、いよいよ登場人物についての深まりが顕著となってきたように思う。

　この章で言えば、まずはピエール。これまでフリーメーソンに入るなど活動的であると思ったが、ここに来て一気にトレンドダウン。生活のいっさいの魅力が失われてしまったらしい。そしてパーティーに、酒と読書の日々。
　さらにロシア中の人から注目されている「昔気質のロシアの旦那」として、「彼の財布はみんなに開放されているので、いつもからだった」（新潮文庫 P.569）。
　そんなピエールも今回の最後には、ナターシャとアンドレイ公爵の間で二人の相談相手となっている。なんとなく頼りがいのある存在になってきた。

　問題はナターシャである。やはり彼女は世間知らず。精神的に自立できておらず、まだまだ子ども。結局、アンドレイ公爵が療養から帰ってくるまでの１年間を待てなかった。さらに、ボルコンスキイ家から快く思われていない。
　言動を受け止めるにあたって、強い予期不安を感じてしまったようである。
　もっともここまでは同情できないわけではない。
　しかし、ワリーシイ公爵のバカ息子アナトーリの甘いささやきにのってしまった。
　ある意味、アナトーリは女性に対して百戦錬磨。ナターシャをくどき落とすくらいは朝飯前だったのだろう。
　ただ、ナターシャ自身がもっと大人であればよかっただけの話。結局、アナトーリにのぼせ上がったナターシャはアンドレイ公爵の妹・マリアに婚約破棄の手紙を送ることになる。
　一見、バカな行為と思われるが、順調に結婚できたとしても、家の格やカルチャーの違い、舅・小姑問題なども予想される中、婚約破棄はナターシャにとって結果オーライだったのではと見ることもできる。
　果してナターシャはこれからどうなるか。
　そしてピエールのポジショニングはどう変わるか。
　もっといろいろな人に注目してみたいが、登場人物が多すぎるため今回はピエールとナターシャの二人に注目してみた。
　それにしても「戦争」はどうなっているのだろうか。

　（おわり）

　おおい元気ぼっくすさんのご著書が発売になりました。
『人生 100 年を楽しむために　ワクワクリベンジ読書のすすめ』

メルマガ読者　デュークさん

『戦争と平和』 第二部第五編まで　感想文

主にナターシャのお話でした。
私は現実的なヴェーラや真面目なソーニャや信心深いマリヤが好きです。
ナターシャはロシア的だからフランス的なリーザに比べて愛されるキャラクターだということですが、おしゃれ大好き舞踏会大好きみたいな女がいろんな男性から愛されるのには納得いきません。
マリヤもリーザは兄嫁として結構好意的に接していたと思いますが、ナターシャには初めから警戒していました。結果、その通りになりました。

アナトーリから秋波を送られ、簡単になびくような女です。文中にもナターシャがアナトーリとの間には壁がないと感じている場面がありました。ピエールが認識している人種、エレンやアナトールやドーロホフみたいな人たちと、ナターシャは同じグループに入ると思います。それなのに全ての顛末を把握しているピエールさえ虜にしてしまう、まさにナターシャは魔性の女だと私には思えました。

ただ、アンドレイも自分がいない結婚までの１年間に好きな人ができたらそれはそれでいいみたいなことを言っていたのだから、一度キスしたくらいだし、平気な顔でアンドレの帰郷を待ってもよかったのに、良心の呵責から苦しんで婚約を破棄したところをみるに、やはりエレンとは違う人種なのかなとは思いました。アンドレイもアナトールもどちらも自分には必要、両方あれば幸せだと思うナターシャ。

「違うタイプの人を好きになってしまう揺れる乙女心よくあるでしょう」by 竹内まりあ。

光源氏なら一度に複数人もあるのになあと思いました。
この後に及んでも「あの人を悪人だなんておっしゃらないで」とういナターシャにも、それに涙ぐむピエールにも共感できませんでした。
今まで読んだところ「戦争と平和」と言うよりは「戦争と恋愛」という感じです。

（おわり）

メルマガ読者　さくらさん

『戦争と平和』 第三巻 P.311～最後までの感想文

第三巻も色々あったはずですが、ナターシャが可哀想すぎてすべて吹っ飛びました。
感想文を書くために少し読み直したら、また涙が止まらなかったです。

（引用はじめ）

「あたくしが　？　いいえ　！　あたくしはなにもかもおしまいです」彼女は恥ずかしく思い、自分をさげすみながら言った。
「なにもかもおしまい？」彼はおうむ返しに言った。「もし僕が僕でなくて、この世でいちばん美男で、頭がよくて、すぐれた人間でしたら、そして、自由な身でしたら、僕はたった今ひざまついて、あなたの手と愛情を求めます」（P.483）

（引用おわり）

こんなにも愛情をもって慰められるピエールがすごくて、私も感動しました。

ナターシャが悪かったけど、アンドレイの、突き放しかたがひどいし、話も聞いてあげないのは、がっかりしました。
前の奥さんの時から少しも変わってないのかな？　と思うと悲しくなりました。
でも、そんな人に限ってやっぱりナターシャが好き。とか言ってきたりするんじゃないのかな？　と思いました。
もしそうなら、かなり引くわって感じです。

ナターシャも淋しい気持ちもあって、横道にそれてしまったかもしれないけど、でもアンドレイの本性が分かってきっと良かったんだと思う。
早く立ち直って欲しいなと思いましたし、今後がすごく気になりました。

（おわり）

メルマガ読者　まこさん

『戦争と平和　第2部第5篇1-第5編 22』読書感想文

今回の範囲は、これまでの楽しい、わくわくするような気分と違って、つらく、思い気分で読みました。

〈マリヤの状況〉マドモワゼル・ブリエンヌともジュリーとも距離ができて味わう孤独、ニコールシカに対する自分の癇癪の発見、老け込むだけでなく虐げと辱めが度を超す父親。それにしてもこの父親と娘は共依存関係にあるのでは？　と前から思っているのですが。

〈ナターシャの状況〉婚約した相手が長らくそばにいないうえに支えとなる母親不在のモスクワでアナトールとエレーヌ兄妹の毒牙にかけられる。
　あまりにもつらい試練を彼女たちに与えるトルストイが恨めしくさえありました。

〈アナトールとエレーヌ兄妹について〉その唾棄すべき言動にあきれ果て、呪いたくなりますが、熟慮する能力のない二人は、人生を単純にゲームのように生きているだけのように見えます。特にアナトールは虚栄心も名誉心もない。結果的に周りを傷つけるやっかいな人たちだなと思います。かえって根っからの悪人なんていないのかなと思わされました。

〈ピエールについて〉繰り広げられる派手なドラマに巻き込まれながら、内省し、観察し、感じ、行動するピエールが結局一番興味をひきました。アンドレイの結婚をよく思わないマリヤの本心や、騒ぎの後のアンドレイの空元気に気づくあたりは相手を思うからこその観察力なのかな、と思いました。最後のナターシャに対する振る舞いは、好意からくるものだとは思いましたが熱烈で少し驚きました。最後の彗星の場面、登場人物が何か思うときは空が出てくるな、と思いましたが、光文社古典新訳文庫の読書ガイドに、彗星について、個人的な出来事と歴史的な出来事の間に生じている時間のずれについての記述が興味深かったです。

（おわり）

メルマガ読者　ワカチコさん

『戦争と平和　第二部第五篇』 感想文

ロシアはティルジットの和約を反故にして、イギリスとの貿易を再開しており、ナポレオンがロシアの国境を越えて来ると、モスクワは焦土作戦で多くの命もろとも焼け落ちてしまいます。古い都の並木通り、礼拝堂、劇場、ごろつきたちの匂い立つような巣窟のいずれもが、もうすぐ見納めになることを、為政者のほかに誰も知らず、五つの家族が結婚と経済問題の厄介事を持ち寄って、モスクワに集結しています。

アレクサンドル 1 世の妹との政略結婚を要求したナポレオンは、屈辱的な拒絶を味わった後、オーストリア皇帝フランツ 1 世の娘と再婚し、その後、ロシアに攻め入ってくるという構図が、まさにボルコンスキー家、ロストフ家、クラーギン家に起きる結婚と経済問題の縮図となって描かれていると私は感じており、あるひとつの因果をマクロ的にもミクロ的にも自由自在に観せてくれます。

ナターシャが劇場で観たオペラ第三幕、むき出しの足の煽情的な輪舞に彼女は同化して頭が舞い上がり、第四幕では落下した『悪魔』しか見ておらず、自分も誘拐事件の悪夢に引きずり込まれてゆきます。なんにでも同化してしまうナターシャは、歴史を動かしているマクロ的なイデアにも感応するのでしょう。

ボルコンスキー老公爵は戦争を批判しつつ、人に対して好戦的で〈岩波文庫三巻 P.337〉、反フランス、反政府勢力の立場を採る愛国主義者として国を憂いています。それはボリスのような、思想を伴わない表面的な指向性に対して、正真正銘のメランコリアであり、胆嚢を患う症状にも顕著で、排他的な偏愛気質が人を遠ざけ、アンドレイにとっての母の不在がニコーレンカにも継承されます。一家の因果をマリアが解消してゆくようなので、老いらくの色ボケでも構いませんから、マリアの人生を見届けてほしく思います。

ところで、モスクワでのピエールの生活は、恩師が亡くなって以降、怠惰になり、家に住みついたアナトールとの乱痴気騒ぎも再発し、金を与え、ひどくたくさん酒を飲むことで思考のもつれを忘れようとする節操の無さは、いまだ善悪の境界線を行ったり来たりしています。

（引用はじめ）

『どんな仕事の分野でも、彼の目から見ると、悪や偽りと結びついていた。何になろうとしても、何をやろうとしても、悪と虚偽が彼を尻込みさせ、あらゆる活動の道をふさいでしまうのだった。だが、それでいながら、生きなければならなかった。何かしていなければならなかった。こうした解決できない人生の問題に押しひしがれているのは、あまりに恐ろしかった。』〈P.318〉

（引用おわり）

ナターシャは自分に向けられる多くの視線には、称賛だけではなく排他的で侮辱的な眼差しや、悪意が交錯していることを体験して、自分自身を知る苦しい涙の末に死と再生を経験します。ナターシャの中で自己認識の相対化が起きていると同時に、自分は善で相手が悪とする評価様式の転換でもありますし、自ら命を絶つことを選ぶ自己本位な善は神からすれば悪であり、人間の善悪の判断も相対化されます。また、ピエールはモスクワでは一転して周りから好意的に迎えられ、変人扱いされていたペテルブルグと逆転します。

凡庸に描かれがちなボリスが、ジュリーのアルバムに『二本の木』と『いと感じやすき心の毒多き糧』という詩を書き添える文脈は、『創世記』の『命の木』と『善悪を知る木』を私に思い出させます。〈P.348-349〉

人間が『悪魔』の化身にそそのかされ、『善悪を知る木』から『知恵の実』を取って食べたことに因って、死は不可避なものとなり、善悪を知ってしまった人間の判断はあくまでも相対的であって、神のみが絶対的善悪を判断できるという神話を『二本の木』は暗示していると思います。読書会から様々なバージョンで共有されている『GOOD/BAD シート©』に私は改めて学びながら、『ピエールの青と赤のイメージ』に関して、今後も考えてみたいと思います。

ナターシャが砒素で自殺を図る筋書きに対して、フローベールのエンマ・ボヴァリーも砒素で自らの命を絶ちますが、ロシアの大作では、まごころの神通力が迷えるナターシャを救い出し、『ボヴァリスム』に落ち込ませない世界観として、トルストイは『ロシアの創世記』を書いているのではないでしょうか。

ピエールが有りったけの愛情でナターシャを元気づけ死から再生させた時、『人類のために何かしたい』〈P.315〉というピエールの切なる願いが、とても身近な人を、言葉の力で救うというミクロ的な関係性において結実しており、彗星の流れる乱世に読まれるべき福音として、冬眠から覚めた熊男に私は感動します。

（おわり）

メルマガ読者　玉井さん

落語レジオンドヌール勲章受賞メモリアル読書感想文

▼本書のハイライト（第 2 部第 5 編第 1 章～第 22 章）：
ボリスが金持ちジュリイと婚約して一方のナターシャはアンドレイと婚約したけど彼の一家に全然ハマらずたまたま劇場で知り合ったアナトールにはばっちりハマったから駆け落ちしようとしたら女将さんにバレて怒られてアンドレイとの婚約も破談になって毒薬も飲んだけどピエールに慰められて結果オーライだったし、あと、流れ星もキレイだったよ……的な話。

▼読書感想文　～シモンズとアナトールにおける虚栄と名誉のすり替えについて　～：
◎シモンズが歌う虚栄：
その昔、シモンズという女性フォークデュオがヒット曲『恋人もいないのに』において「♪恋人もいないのに　薔薇の花束抱いて　いそいそ出かけて行きました」と歌っており、これを聴いた私は、シモンズは見栄っ張りだなあと思った。なぜというに、前述の「薔薇の花束」における薔薇の花言葉は「純愛」であることからも分かる通り、薔薇とは元来、愛の誓いとして恋人に贈るべき代物だからである。それにも関わらず、シモンズときたら恋人もいないのに薔薇を持って出かけて行くとはお門違いもいいところであり、それだけにとどまらず「いそいそ」出かけて行ったというんだからいよいよタチが悪い。だってそうじゃん、薔薇を渡す相手が居ないならボーっと歩けばいいものを、いそいそ――つまり、わざわざ急ぎ足で用事ありげに向かっており、これ見よがしの行動ともいえ、こうした状況も踏まえたからこそ私は「見栄っ張りだなあ」と前述したのであり、してみればこの曲のモチーフは「虚栄心」といいう事になるのであるからして……あっ！そういえば昨日、私は落語研究者としての長年の功績が称えられ、この度「落語レジオンドヌール勲章」を拝受するという栄誉に預かった。光栄である。素直に嬉しい。嬉しいのでさっき Twitter で報告したら「自慢してんじゃねーよバカ」「うぜー」といったコメントが大量に返ってきた。どういうわけか、私は他者から見栄っ張りと思われているようなのでこの場を借りて弁解させて頂きたく、で、その弁解のためには本書『戦争と平和』の第 2 部第 5 編第 20 章が必要不可欠である。

◎アナトールが謳う名誉：
第 20 章では、ナターシャ誘拐未遂事件の首謀者アナトールに対し、ピエールが ≪きみ自身の満足のほかに、他の人々の幸福と平和というものがあるのだよ。きみは自分が楽しみたいために、ひとりの人間の一生を滅ぼしているんだよ。※中略※　それが老人や子供を殴り倒すにも等しい卑劣なことであるくらい、きみにわからぬはずがない≫ と叱りつける場面があるが、この発言に対するアナトールの言い分は ≪そんなことは知らんね。≫ とした上で、ピエールに向かって ≪きみは、卑劣とか卑怯とか、ぼくが、名誉を重んずる人間として、だれにも許すことのできぬ言辞を弄しましたね≫ と反発して謝罪を要求、ピエールはアナトールにしぶしぶ謝罪すると共に旅費まで渡してしまうのである。

◎アナトールの虚栄／名誉としての落語レジオンドヌール：
上記引用において注目すべきはアナトールの「名誉を重んずる人間」という文言であり、ここがおかしい。名誉というのは他者からの評判を指していうのであって、アナトール本人が名誉を自称している点に彼の厚かましさが浮き彫りとなっている。そもそも彼は私利私欲の人であり、ナターシャへの接近も己の虚栄心を満たすためのひとりよがりな行動であるにも関わらず、名誉の笠を着てピエールを欺いたのである。よって、アナトールもシモンズと同様、虚栄の人である(なお、第 13 章でナターシャはアナトールからの好意に ≪虚栄心の満足≫ を覚えており、彼女も同類である)。そして一方の私はというと、虚栄ではなく名誉ある人間といえる。だってそうじゃん、落語レジオンドヌールは私が一方的に自称したり、受

賞させろと強要したのではなく、他者が私に与えた勲章、つまり名誉の証なのだから。というわけで私は見栄っ張りなんかじゃないし、今後は私の事を名誉ある人物として接してくれたらいいのになあとひとりで勝手に望んでいる次第である。

といったことを考えながら、次回の感想文はがんばるので今回はこれでお願いします。

以上

（おわり）

信州読書会　主宰　宮澤さん

思想上の大祖国戦争

第二部　第五編の内容は、ナポレオンのモスクワ侵攻の前夜祭といった印象である

ロシアの近代化の旗振り役だったスペランスキー伯爵の突然の失脚と流刑、アンドレイとナターシャの婚約破棄、そしてモスクワ上空に現れた、時代と運命の転換点を象徴するようなハレー彗星、これらの出来事を潮目として、小説は、これまで描かれていたモスクワとペテルブルグの二大都市での社交界から、ロシアの祖国解放戦争へと舞台を変えるのである。

ナポレオンへの侵攻に対するリアクションを、ロシア人は「祖国解放」と定義している。第二次世界大戦でのナチスドイツとの戦いも「大祖国戦争」と名付けている。他国の侵略からの解放という意味では、ウクライナ侵攻も「同朋ロシア系民族の解放のための特別軍事作戦」とおそらく、ロシア人は考えているだろう。ロシア人を世界の中心として考えればそういうことになっているそうだ。

祖国解放とは、何からの解放感であろうか？　それはナポレオンの大陸封鎖からの経済的解放である。ロシアは、ティルジット講和以降、イギリスとの貿易が制限され経済的に大打撃を受けた。しかし、重要なのは、啓蒙思想の普及とフランス革命以降にロシア人の頭にも侵入してきた、おフランス思想からの解放という意味もある。ナポレオンが侵攻するはるか以前から、ロシア人の頭の中を侵攻してきたおフランス的な自由主義や個人主義が、ロシアの魂を蝕んでいたのである。
つまりは、エレンやアナトールのおフランス直輸入の享楽的個人主義とそれに伴う道徳的退廃が、ドジっ子ロシア人のナターシャに感化を及ぼし、それが、アンドレイとの婚約破棄の間接的の原因となっている。

『エレンの感化で、今まで恐ろしく思えていたことが、簡単で自然に感じられた。』(P.407)
『燃えるような唇が彼女の唇に押し当てられた。そして、その瞬間に彼女は自分がまた自由になったのを感じた』(P.413)

これがおフランス流の自由主義であり、個人主義である。パウダールームでアナトールとキスして感じたナターシャの「自由」とは婚約してても自分が自由だと思うなら、浮気しようが、何しようが「自由」であるという思想である。

こういう浮薄なおフランス流に対応して、ボルコンスキー老公爵の陰険かつ反動的な、ロシア的保守思想が燃え盛るのだが、その老公爵も、フランス人コンパニオン、マドモワゼル・ブリエンヌに頭にやられたふりをしてマリアをいじめ抜くのがなんとも恐ろしいのである。さらにパジャマ姿で一芝居打って神の名を語りながら、無礼をはたらくというというボルコンスキーパパの老獪さがたまらない。手のこんだ嫌がらせは、見ている分には面白いが、やられたらこたえる。

「お前たちのいるところには堕落が、悪がある」 (P.466)

ピエールは、腐ったリンゴの方程式みたいなエレンの頭に巣食う、おフランス思想からロシアの魂を救い出すという、思想上の大祖国戦争をおおっぱじめるのである。
ピエールは腐ったリンゴ、ナターシャを救えるのか？　この若いリンゴをそのまま腐らせてしまうのか？
（おわり）